

第97回 三方限古典塾（'14, 11, 20）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3-14）

- 1 天地は万^{ばん}古^こ有るも、此の身は再び得られず。人生は只百年なるのみ。此の日最も過^{すこ}し易^{さい}し。幸^{さいわい}に其の間に生まるる者は、有生^{ゆうせい}の楽しみを知らざるべからず、亦虚^{きよせい}生の憂^いいを懐^{いだ}かざるべからず。前集 108

（意識） 天地は永遠であるが、人生は二度ともどらない。人の寿命は人生はせいぜい百年、あっという間に過ぎ去ってしまう。幸いにこの世に生まれたからには、楽しく生きたいと願うばかりでなく、人生を虚しく過ごすことへ恐れを持たなければいけない。

（余説） 釈尊は「地べたの土はこの世に生まれる様々な命の数である。しかし、人として生まれてくる命の数は爪の上にのせたこの土ほどしかない。だからこの恵まれた命を大切にしないといけない。」と十大弟子の一人阿難陀^{あなんだ}に諭されています。また同様に、「人身受け難し。今已^{すで}に受く。この身今生に向かつて度せずんば、さらにいずれの生に向かつてかこの身を度せん」と、人として生まれることの稀少さを教えています。

言志後録 109 にも「百年、再生の我無し。其れ曠^{こう}度^とすべけんや」（誰もが百年たつて再び生まれることはない。だから、一日一日を空しく過ごしてはいけない）があります。

人としての命をこの時代に、この国のこの地にいただき、生きていることの有り難さを今一度考え直し、それに相応しい生き方ができるように努めたいものです。

- （参考）法句經 182 「人の生^{しょう}を享^うくるはかたくやがて死すべきもののいま生命^{いのち}あるはありがたし 正法^{しょうぼう}を耳にするはかたく 諸仏^{しよぶつ}の世に出づるもありがたし」

- 2 人の小過^{しょうか}を責めず、人の陰私^{いんし}を発^{あば}かず。人の旧悪^{おむ}を念^{おも}わず。三者は、以て徳を養^{もつ}うべく、亦以て害を遠^{とほ}ざくべし。前集 106

（意識） 他人の小さな過失はとがめない、他人の隠し事はあばかない。他人の古傷は忘れてやる。この三つのことを心がければ、自分の人格を高めるばかりでなく、人のうらみを買わない道である。

（余説） 誰にもささいな過失はあります。多少のミスは互いに許し合うことです。また、隠しておきたい触れられたくないプライバシーがあります。若い時の古傷などをいつまでも話題にしないことです。人は他人に対する優越感を求め、劣等感に腹を立てがちな動物です。それほど強くも賢くも美しくもなれないのが人間の常です。

水が豊富なわが国には「水に流す」という言葉があります。過去のことをとやかく言わず、すべてなかったことにしようという意味です。だからといって、「なあなあ」で馴れ合いと妥協だけになっては、お互いのためになりません。そこの塩梅の具合が人の世の難しさであると同時に面白さではないでしょうか。

- （参考）論語・公治長篇114 「伯夷^{はくい}叔斉^{しゆくせい} 不念舊悪^{ふねんきうあく} 怨是用希^{うらこはもつ}」
（伯夷、叔 斉は旧悪を念わず。怨み、是をもって希なり）

伯夷と叔斉は紀元前千年頃の中国・殷の人、清廉潔白な人物の代表で兄弟です。西周で主君を諫めるも聞き入れられないのを恥じ、山に入り餓死したと伝えられています。

3 人の短処は、曲に弥縫を為すを要す。如し暴きて之れを揚ぐれば、是れ短を以て短を攻むるなり。人の頑あるものは、善く化誨を為すを要す。如し忿りて之を嫉まば、是れ頑を以て頑を濟るなり。 前集 122

(意訳) 他人の短所は、うまく取りつくろってやらねばならない。もしそれをむやみにあばきたてるのは、自分の短所で相手の短所を責めるようなもので、相手の短所は改まらない。頑固な人に対しては、辛抱強く説得しなければならない。へたに感情的になって突っかかるのは、頑固をもって頑固を助長するようなもので逆効果になる。

(余説) 短所がない人はまず存在しない、短所があつてこそ人間です。そうは言っても、思わず相手の短所を突いてしまうことが多々です。「他者には長を見て短は見ず、己には短を見て長を見ず」とも言いますが、なかなか至難の業です。特に、人前で相手の欠点を言い立てることは卑怯な行為であり、相手を傷つけることにもなりますので、絶対に避けたいものです。このことは家族の場合でも配慮が必要だと感じます。

他者の短所をそのままを受け容れる宥恕の心を持つことができると、世の中はずいぶんとよくなるように考えます。それは宗教心にもつながるようにも思われます。

(参考) 論語衛靈公 15 「躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣」
 (躬自ら厚くして、薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる)
 「自分に厳しく、他人に寛大にすれば、怨まれることが少ない」

4 人の詐りを覚るも、言に形わさず。人の侮りを受くるも、色を動かさず。此の中に無窮の意味有り、亦無窮の受用有り。 前集 127

(意訳) 相手が自分をだましていると気づいても、それを言葉や表情に出さない。相手が自分をばかにしているような時でも怒りで顔色を変えたりはしない。このような態度の中に、言い尽くせない深いおもむきがあり、また、計り知れない働きがある。

(余説) 仏陀は「自分の考えが勝っているとこだわるならば、それ以外のすべてを劣っていると思ってしまう。だから論争になるのだ」と説いています。例え、相手のほうが間違っているという証拠があつても、追いつめないことが大人の品性です。しょうか。

中国の三国時代を記した『三国志』の主人公劉備玄德は、「語言少なく、善く人に下り、喜怒を色に形さず」と評されています。「寡黙で謙虚、しかも喜怒を色に形さず」です。喜びはともかく、怒りや不機嫌をすぐに顔色に出すようでは、指導者はもちろん大人として失格の評価を受けそうです。例え不利な状況や不愉快な場面に出会っても、泰然自若と構えている姿には「無窮の受用」があると思われます。

しかし反面では、下手にこれをまねると、冷たいなどの人間味に欠けるマイナス・イメージを与えがちです。それを補う「後一つの資質」は何だと思われますか。

(参考) 「無窮」の言葉で思い出すこと 『天壤無窮の神勅』
 天照大神が、孫の瓊瓊杵尊を降臨させた時与えた授けたお告げ
 「豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり爾皇孫就きて治らせ。行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮まり無かるべし」